自然界の旬

㉒ 豪雪に耐える

七塚原高原は40㎝の積雪

体重の重い動物は動けない？

今シーズン二度目の大雪が降った。年末には、山陰地方に大雪が降って、国道九号線が大渋滞を起こし、多くの人々が苦しめられた。それを助けようと多くの人々が暖かい手を差しのべた。いつも大きな災害が起きると、人間本来の美しい善意が現れる。こんなすばらしい人間の善行が、小さな苦しみにも手を差しのべる行為となって現れないものか。そうすればもう少し潤いのある日本になるだろうに。

一月十七日から十八日の大雪では、ここ七塚原高原でも四十センチメートルの積雪がみられた。雪の重みに長期間ひたすら耐えているのは、植え込みのヒラドツツジとイヌツゲ。二～三日耐えているのがイヌマキ、トウネズミモチ、ソヨゴ。一日で雪をほとんど落としてしまうのがサクラ、カエデ、コナラ。雪に対して楽をしているのは落葉樹である。トウネズミモチやソヨゴは、毎冬雪に痛めつけられて、枝が折れる被害に遭っている。

一月十八日、動物の足跡を見ようと思い山に入ったが、雪が深くて難渋した。雪面にはノウサギの足跡だけ見つかった。あまりに雪が深いので、体重の重い動物は動けなかったのだろうか？山裾では、ホオジロが盛んに萱の実をついばんでいた。そのうちに桜の老木にエナガの団体がやってきた。上がったり下がったり、忙しい餌探しが始まった。しばらく見ていると、エナガの団体の中にシジュウカラとコゲラがいるではないか。みんな一緒に移動していった。

雪の日の小鳥たちは、人間など眼中にないといった振る舞いである。お陰でじっくりと美しい姿を見させてもらった。積雪の多い日は、小鳥たちの行動場所が限られてくるので、観察に適しているかもしれない。

（NPO法人七塚原自然体験活動研究センター　理事長　西村清巳）

コノデガシワ（上左）、イヌマキ（上右）、ソメイヨシノ（中）、ヒラドツツジ（下）

意外な野外のガイダンス
～田んぼの生きもの編～
⑱ タシギ

土塊と見間違うほどの保護色

スナイパーの語源はタシギ猟から

氷の張った田んぼで、嘴を土中に突っ込んでせわしなく動き回るタシギ。漢字で書くと〝田鴫〟であり、まさに田んぼで見られるシギの代表種と言えるでしょう。広島県では冬季にほぼ全域で見られ、寒い冬を日本で過ごす冬鳥の一種です。全長は二十六センチメートル程度の小さな鳥ですが、その特徴的な嘴は、頭部の倍はあろうかというほど非常に長く、湿水田や柔らかい泥土に突っ込んで土中のミミズや昆虫などを食べます。臆病な鳥で、危険を感じると直ちにその場にしゃがみこみ、じっと動かなくなります。すると、羽が見事な保護色となり、まるで枯れ草の付いた土塊のように見え、目の前にいるはずなのに肉眼では何処にいたのか分からなくなるほどです。それに気づかずに、歩み寄って近づくと、突然足元から「ジェッ」という鳴き声を残して飛び立ち、驚かされることもしばしばです。

氷の張った田んぼで餌を探す

欧州ではジビエ（狩猟によって食材として捕獲された野生鳥獣で、フランス料理の用語）として重宝され、日本でも「骨が柔らかく、その食味は正に焼鳥の王者である（大日本猟友会狩猟読本）」と言われる狩猟鳥の一つです。英語でタシギはsnipe（スナイプ）と表し、遠距離からじっと身を伏せて相手を狙う戦術用語の〝狙撃（sniping）〟〝狙撃手（sniper）〟の語源は、実はタシギ猟から来ています。

日本に飛来する個体数は少なくはないのですが、近代農業に伴う乾田化により、冬季、タシギが好むような湿った田んぼが少なくなってきており、確認できる田んぼは限られてきているように思います。物影や車内からだと警戒心も薄れるようで、意外とそばまで近寄ることができるので、真冬に元気に活動する鳥たちを観察してみてはいかがでしょうか。

（環境保全課　原　竜也）

嘴を土中に突っ込んで動き回る

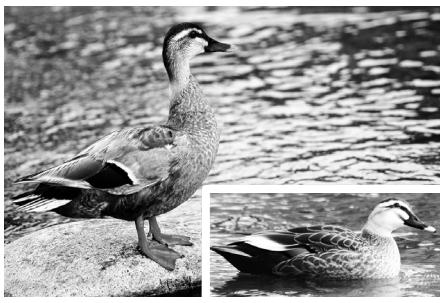
いきものをまもる
㉒ アイガモ

野生化と交雑による影響

マガモやカルガモにみられる遺伝子汚染

最近は少し下火になりましたが、合鴨農法というものがあります。アイガモを水田に離して雑草を食べさせ、除草剤の使用を減らす有機農業の一種です。田植え時期に雛を放し、収穫後には食肉として利用します。アイガモとは、野生のマガモとそれを家畜化したアヒルの交雑個体のことです。つまり、アイガモもアヒルも生物学的にはマガモということになります。

マガモは冬鳥として全国に渡来しますが、本来の繁殖地は北海道と本州中部の山地です。ところが、西南日本の各地でもマガモの繁殖がみられるようになりました。これは、野生のマガモではなく、野生化したアイガモの子孫だと考えられています。意図的ではないにしても、合鴨農法などで飼育されていたアイガモが野生化する可能性はありそうです。



カルガモとマガモの交雑個体（左）、カルガモ（右下）

多くのカモ類は冬鳥ですが、日本で繁殖する種としてカルガモがよく知られています。最近、カルガモとマガモの雑種が観察されることが多くなりました。これも、野生化したアイガモとの交雑だと考えられています。多くのカモ類は、雄のほうが目立つ体色をしていますが、雌が同種の雄を間違えないためで、最近の研究では雌の好みが雄の特徴的な色や模様を進化させるといわれています。しかし、カルガモは雄が雌と同じ姿をしています。日本では他のカモ類が繁殖しないため、雌は同種の雄を色や模様で識別する必要がなかったのでしょう。そのため、カルガモの雌は、姿が違うアイガモの雄も受け入れやすいのかもしれません。

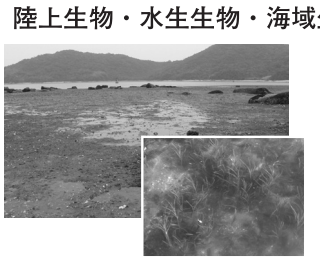
野生化したアイガモと、野生のマガモやカルガモとの交雑は深刻だと心配する研究者もいます。遺伝子汚染と呼ばれ、生息地の環境に適応できるように進化してきた遺伝的な形質を変化させるかもしれないからです。自然の河川でアヒルを飼育する場合にも、同じような状況を引き起こす可能性があります。生物を利用する場合には、近縁種への意図しない影響にも十分な配慮が必要です。

（業務開発課　井原　庸）

生　物　調　査　事　業

さまざまな人間活動や生活様式の変化により、近年地域の生物が減っています。豊かな自然は私たちの暮らしにとってなくてはならないものです。
当協会では、身近な自然を知り、大切な生き物を守るための生物調査事業を行っています。

地域の自然を知る
陸上生物・水生生物・海域生物調査



大切な生き物を守る
野生動植物保全対策調査

失われた自然を取り戻す
自然再生計画立案・実施

実施の枠組み
住民や行政・事業者の自然との共生の取組みを生物保全の専門家としてお手伝いします。

住民 → 自然との共生 ← 行政・事業
↑　↑
（財）広島県環境保健協会

問い合わせ：
財団法人広島県環境保健協会
環境生活センター　環境保全課
電話：082-293-1580（ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ）FAX：082-293-5049